

# 介護老人保健施設オアシス21

症 例 概 要 入所者：男性 70代 要介護度3

病名：脳梗塞左不全麻痺、神経障害疼痛、不眠症、胆摘術後

経過：K市で大工をしていたが60代でラクナ梗塞を発症。約10年後、脊柱管狭窄症・椎間板ヘルニアにて腰痛・右下肢痛あるが、歩行自立レベル。身寄りがなく知人などの協力もあり、当施設にて冬季入所しながら在宅生活を継続していた。

R4年3月末にオアシス退所し自宅へ戻るも、知り合いが相次いで離れて行き（知人や担当訪問看護師が悪性疾患に罹り訪問が途絶えた）、可愛がっていた野良猫も殺処分され意欲低下。外出デイケアだけの生活の中、転倒して右側腹部を打撲し、訪問診療で臨床的に肋骨の亀裂骨折と診断されるが、独居療養が難しく、5月に緊急短期入所。全身状態特変ないが精神的落ち込みが著明にて、全職員で親身なこころのケアに取り組み、好きな野球と畑づくりの役割をもち、その中で生きがいを見つけ元気を取りもどしていった症例。

## 内 容

当施設の通所リハビリに通っていたが、表情が暗く、元気がないことに職員が気付く。「昨日、転んじゃって痛くて。」と苦痛の表情となっていた。すぐ訪問診察のDrへ報告し診察をしていただき、右肋骨亀裂骨折と診断。痛みがあるもののADLは自立されていた。しかし、精神的な落ち込みがひどく、不眠傾向で食欲低下もあり緊急短期入所となる。

右肋骨の痛みもあったが苦悶が続くため、寄り添いながら、お話をお伺いすると、相談役の知人は「がんが再発した。もう面倒が見られない。ここで縁をきりましょう。」と言われ、頼りにしていた訪問看護師さんも肺がんが見つかり、「今日で最後です。」とあいさつされ担当が交代になってしまった。可愛がっていた野良猫も通報され殺処分になっていた。身近な人たちが次々と離れていき、孤独と寂しさで不安でいっぱいだったことがわかりました。

理念にある「地域で生活する方々がその人らしく生活することができるように安心・信頼される介護・看護・リハビリテーションを提供する」とあるように利用者さんらしく生活していただくためにはどうしたらよいかカンファレンスを開催。

「1人じゃない。利用者さんの存在が必要で大切であること」をケアしていこうと話し合う。ご本人は「何もできなくなった。ダメだわ。」と悲観的であったが、以前に「好きな事」である野球や畑づくりなどがしたいという希望があったことをケアマネが熟知していた。

ICFの社会参加を重点的に「心のケア」をして全職員で勇気づけしていこうとアプローチしていった。

①BIG BOSS 応援団の団長になり、他利用者さんと本気でファイターズを応援する

消灯近くまで応援し、負けても終始笑顔で、翌日も試合結果について会話ができており他利用者さんとのコミュニケーションも増えていった。

②「チーム赤じそ」の水やり部長として、畑のみずやりを担当する。

苗植えから担当していただき、天気を気にされ、水やりを実行。当初は消極的でしたが、徐々に表情が明るくなっていき、活動量が向上し車椅子歩行でしたが杖歩行可能になり、6月に自宅退所計画。

③退所後のうつ予防として、仲のよい同室者とレクをしながら交友を深めていただき、男友達づくりに成功。同じ曜日にデイ利用を希望され、今後利用予定となる。

今回のように、親身に寄りそいながら勇気づけをおこない社会的役割をもつことで、早期に心のケアができ、笑顔が増えADL向上したと考え報告いたします。